

詩同人誌評

第4回

記憶・別離の不思議

中塚 鞠子

深沢七郎が「自伝とところどころ」で書いている。「屁は生理作用で胎内に発生して放出されるもので、人間が生まれることも屁と同じように生理作用で母親の胎内に発生して放出されるのだと思う。(略)人間は誰でも屁と同じように生まれたのだと思う。生れたことなどタイしたことはないと思っている」と。だから死ぬこともタイしたことはない、ということになる。面白い見解だ。が、しかし短い一生。人の死は永遠に文学のテーマだ。そして同時に別れも。深沢七郎のようににはなかなかいえない。別離の記憶をどう考えるかそれぞれなので考えさせられた。

井崎外枝子「死に直しの日に」〔笛〕297号

生き直すっていうのだから

死に直すがあってもいいのでは

中途半端だったからね あの時

だからいつまでたつてもこうで

もう七回忌も過ぎたというのに

何も終わった気がしない

今度はシツカリ死ぬためにもどつて来て

みんなそのままにしてあるから

(略)

なんの備えもせず 部屋もそのまま

必要なものもあるでしょう

日記も途中のようだし

(略)

今度はゆっくり準備して行くといい

そうそう二階の部屋 温めておかないと

途中を抜かして紹介したが、まるで、下宿

に出ていった息子を迎えるように、居なくな

った人を迎えようとしている。「死に直し」と

いうものが本当にできる気がしてくる。心に

残る挽歌である。

吉井淑「追う」〔Z記〕7号

日暮れを歩きたくなると

勝手口から出る

いつものように

腰の曲がった老婆が

前を歩いている

すっかり曲がつて

横を歩いている幼女の方が

背を越えて高い

細くしわくちャの手が

幼女の手を握っている

(略)

老いた私の前を歩いているのは

とうに死んだ祖母

ひたひたひたひた

町から野の方へ追つていく

と

走り出す

何かを誰かを

彼女も追いかけているらしく

(略)

私の前を歩いている祖母は私かもしれない

し、いつも置き去りにされる幼女が私なのか

もしれない。人は皆いつたい何を追つて人生

を終わらせるのだろう。見えないけれどもつ

ながっているもの。それを追うのだろうか。

小田悦子「謹賀新年」〔RIVIERE〕180号

今年はだれに出そうかな

一年前の年賀状を見て考える
だんだん少なくなっても
なつかしい 顔が浮かぶ

何年も前に亡くなった主人あてに
今も賀状が届く
亡くなりましたと返事を出しても

全文印刷の 賀状が届く

この方の住所録には
今も主人は健在なのだ
生かしておいてくださる
それもいいか

これも一部であるが、何気ない日々の暮らし
の中で、相手側のうっかりミスでありながら、
失った人へきた年賀状がなぜか嬉しい。「生か
しておいてくださる」という表現が気持ちを
よく表していると思う。

北側清仁「another」(「アリゼ」205号)

もう会えない

もう

とはなんだろう

ほかのどの日でもない

ただ一度かぎりの

今日を生きるのに

もう
とはなんだろう

空の雲

打ち寄せる波
今日の世界のすがたは
二度とはない
一度きりのことであるはずなのに

いまここ以外
どこにも自分のあり処は
ありえないのに
もう

とはなんだろう

なぜ

ほくは
あすに あさつてに

一年後三年後に
到来していかない時のうちに
安堵と希望を託すのだから

なぜ ほくは

もう

と打ち消されたら
打ちひしがれて こんなに
とほうにくれてしまうのだから

長い引用になったが、注目した作品の多い
中で、この詩はひときわ目を引く。恋人が友
人か、だれかわからないが、「もう あえない」
と言われることで、自分の立ち処は現在のこ
こ以外にないのに、あるかないかわからない
未来のために、打ちひしがれている自分を
知る。実存主義的詩で大変面白い。

藤井優子「ホワイトアウト」(「アリゼ」206号)

眠る冬

北の国はものごとを進めない
止まった時のなかで好きなだけ夢をみる
雪が降ると寂しい生き物の気配がして
終わった夢も違う物語に作りかえられ
ゆつくりと春までに哀しみをやり過ぐす
この十三年で一度だけ訪ねてきた父は
あの時が岐れ路だったと言った
覚めてからもいつのことかわらざにいるが
深い雪の間に包まれながら 繰り返し
父はわたしの別の結末を夢みていたのか
もしれない
(略)

とはなぜ戻れなくなるのだから
降りしきる雪の向こうに

わたしを待っている人がいる

父と子の間にいったい何があったのだろう。深い雪に閉ざされた町で。十三年ぶりに見た夢に出てきた父の「あの時が岐れ道だった」というあの時さえ分らない。しかし切ない子どもの記憶は張り付いたままなのだ。待っている人を思いながら戻れない気持ちで降りしきる雪に閉ざされて切なく伝わってくる。

柳内やすこ「哀しみのDNA」(「アリエ」206号)

角田光代の小説中の会話に

「いつからかなしいという感情が芽生えるのかしら」

「そりゃあ、生まれたときからあるだろう」とあった

生まれたばかりの小さな命が持つ

かなしみとは一体どんなものだろう

それはきつと

お腹が空いたとかオムツが濡れたとか

暑い寒いではなくて

この先長い年月を生きていく人としての誰もが持つ根源的な哀しみのようなもの

(略)

哀しみの感情を赤ちゃんは生まれたときから持っていると言くと書く角田光代さんも、赤ちゃんの胸に潜む微かな痛みを芽を感じる柳内さんも、詩人だなー、と感じる。

瀬野とし「耳」(「軸」142号)

「葬儀屋さんがね……」

ひとりがいうと

シツ

別のひとりが 唇に指を立て

小さな声で

「聞こえているのよ 最後まで」

ベッドのあなたの目は

目蓋で閉じられ もう見えず

口は閉じられ もう話せない

蓋のない耳だけは

聞こえ続けて

(略)

聞き上手なひとだった

つらいことも聞いてもらった

(略)

つないだ管の機械音のなか

駆けつけてベッドを囲んだわたしたち

あなたの最後の耳に せめて送りたい

わたしたちの息づかい

「あなたに出会うことができ
ほんとうに うれしかった」

私は死んだことがないのでわからないが、確かに人間聴力が最後まで残るといわれる。脳梗塞などで、まったく脳死状態に見える人でさえ、耳は聞こえているという。しかし、「蓋のない耳だけは／聞こえ続けて」といわれて、びつくりした。今は、みんなに取り囲まれて送ってもらえない。しかも普通は親族だけで、というのが多い。賑やかにお友達に見送られて、幸せな人である。

河野百合子「夕日」(「天秤宮Ⅱ創刊号」)

まだ待つて

水平線に

夕日がフェイドアウトしていく

(すぐ来てください)

グループホームからの突然の電話

走らせる車の

片道二時間の道のりが

いっそう遠い 遠い

(略)

伝えてないことがある

渡せてないものがある

どうかその名を呼ばせてほしい

(もう急ぐ必要は なくなりました)

傾いた肩に

傾いた声が

傾きながら

すべり落ちていった

突然の知らせに、車を飛ばして、急いで、急いで。でも、間に合わなかった。そんな落胆した様子、絶望感が最後の連でよく出ている。主語がどこにも出てこないし、相手が誰かも書いてない。緊迫感と、絶望感がだけが浮き上がる。誰が読んでも、自分に当てはめて読める、よくできた詩だと思っ。

終刊した「天秤宮」が装いも新たに「天秤宮II」として出た。

高橋富美子「穴について」(「木想」12号)

兄が穴を掘っている かぶせた新聞紙にスコップで土をかけ平らにならし そこを通るものが穴の中に転落する手はずになっている 穴のあるところまで喧嘩相手をおびきよせるのがわたしの役割……(略)……兄はあれからずっと穴を掘り続けている……空にぽっかり空いた穴にひとが吸い込まれ

ていくのをぼんやりと見ている 蒼くて深い穴の淵 覗けば奥は漆黒の闇……(略)

仕掛けられた穴は不意に人を呑み込むから不用意に空など眺めてはならないという。はじめは兄のいたずらの穴掘りだった。しかし大人になっても、やはり穴は仕掛けられるものらしい。誰が仕掛けるか? 敵か? 社会か? 神か? ひよつとすると自分自身かもしれない。ただ、一人ひとりにはあてがわれた穴があって、落ちてゆくその時に気づくとはなんと悲しいことか。

おおつぼ栄「やわらかく滲んだ線」(IV) (「笛」298号)

……封印

枯野の隅に穴を掘ってMを埋める
深い穴にMの思いい出を埋める
日々剥がれる記憶の欠片
今のうちに留めておく
私はあなたを忘れないと
冬の大地に刻み込んでおく

この詩は、日々の生活の中でのスナップであったり、ときどきの思いであったり、深い思念であったりするものを、シリーズで書か

れているらしい。たまたま「……封印」の穴に目が留まった。高橋さんの穴はへ深い穴にはまりこんで苦悶したあげく ようやく這いあがった瞬間に 穴の存在など忘れてしまうものだ」とある。おおつぼさんはMを埋めるMの思いい出を埋めるそれは記憶が剥がれていくから、忘れないために、冬の大地に埋めるのである。

これは書評なのだが、紹介している詩集をぜひ読みたいと思ったので紹介しておく。

中野徹「記憶の行方」(「笛」297号) 宮尾壽里子『海から来た猫』書評

明け方の夢の中に
失くした片方の手袋が
落ちていた
(略)

随分前に失くした あの片方の手袋は
なにかを掴んだ形のまま
夢のなかに落ちていなのだろう ずっと
(「方夢」)

*今回も素敵な詩に出会えて幸せでした。

【受贈詩誌】

「アリゼ」20号・「異郷」58号・「石ノ森」193号・「呼吸」151号・「いのちの籠」49号・「CROSS ROAD」18号・「リングの木」59号・「表情」30号・「ひょうたん」75号・「Master」58号・「飛脚」30・31号・「ほとり」64号・「多島海」40号・「三重詩人」255・256号・「笛」297・298号・「RIVER」179・180号・「潮流詩派」267・268号・「軸」141・142号・「指名手配」4号・「天秤宮Ⅱ」1号・「雲」2号・「小手鞠」22号・「PO」183号・「風のとより」23号・「波蝕」29号・「木立ち」140・141号・「ア・テンボ」60号